

# 郭公の声に

(昭和三年寮歌)

古河勝夫 君 作歌  
宮本正治 君 作曲

一

郭公の声に迷夢の夜は明けて  
紫紺の雲の色も褪めゆき  
春芝草に風のそよげば  
旭光は見よ東雲の沈黙を破り  
自然の精姿紅に揺らぎぬ  
讃へなんうら若き日の  
朝の神秘を

二

濃緑に原始の森の茂る候  
君影草の花も散り果て  
クローバの上に胡蝶舞ひ舞ふ  
蒼空の小鳥を追ふか陽炎立ちて  
牧場に悠き牛の声聞く  
仰臥せる牧童の上に雲は動かず

三

俊巖の秋気何時しか野に充ちて  
可憐し虫の音ものを思はず  
移ろふ自然の色彩賑はへど  
沁々と人の運命の秋も偲ばれ  
淋しき哀愁に涙にじみて  
蕭々の夕風いとど身には悩し

四

銀月は今雪原の上に照り  
エルムの梢淡青く映りて  
野末に籠むる夢の狭霧の  
奥深く幻想の燈火の明滅を見る  
凍らんとする靈気かすかに  
一条の櫓路に残る鈴に震へり

五

丈なせる草踏み分けて蝦夷ヶ野に  
迪を恵ねし人の姿よ  
さ迷ひ暮れて星仰ぎけん  
ああそこに原始の影は更に薄れて  
老いし楡に嵐荒涼びつ  
夕陽は手稻の背淡紅く映せり

六

白樺よポプラ並木よアカシヤよ  
春秋三度廻り去りなば  
若き生命は疾くに萎え果て  
逝にし日の宴遊の宵の  
夢も追ひ得じ  
此の経営に思想分ちし  
寮友よ心の記念永久に謳はん